環境報告書への評価

他大学との意見交換

静岡大学・岐阜大学との環境コミュニケーション

環境報告書のさらなる充実を目指して

環境コミュニケーションの一環として、本学では毎年、環境に関する優れた取組をされている大学や企業との間で意見交換を行っています。この意見交換では、環境報告書を持ち寄り、学外からの視点で環境報告書の記載内容を互いに評価し、学び合うことで、環境活動そのものや、環境報告書の記載事項のさらなる充実を図ることを目的としています。

今回はコロナ禍の中「三密」を回避するため、Web会議システムを活用し、2020年8月31日に静岡大学・岐阜大学・名古屋大学の環境報告書の作成に携わる関係者がオンラインにて、意見交換を行いました。

静岡大学は、大学活動のあらゆる面において、環境保全に努めるための具体的な行動計画として「静岡大学グリーンキャンパス構築指針・行動計画2016-2021」および「エネルギー管理マニュアル2016-2021」を策定し、PDCAサイクルを構築して環境負荷低減・省エネルギーの推進に取り組んでいます。

岐阜大学は、ISO14001の認証を、附属病院を除く全学で取得しており、全学的なマネジメント体制を構築し、PDCAサイクルを回して環境活動の継続的な改善を進めるとともに、環境意識向上のための教育や啓発活動についても取り組んでいます。さらに、「二酸化炭素排出量を2030年度において、2013年度比40%削減」を目標に掲げ、積極的なエネルギーマネジメントにも取り組んでいます。

両大学共に、大学の特徴を生かした環境報告書を作成されており、目標の設定の仕方や記事の充実度、内容、その構成など、多数の工夫がされていました。

オンラインでの意見交換は、初めての試みで成果を懸念しましたが、活発な意見交換が行われ、本学の環境活動の発展につながる大変有意義なものになりました。同時にやはり例年通りFace to Face―顔を突き合わせての意見交換、コミュニケーションの大切さも実感したため、次年度以降、また一堂に会しての意見交換ができることを期待しています。

今回いただいた貴重なアドバイスや静岡大学、岐阜大学の先進的な取組を、今後の環境報告書の作成および環境活動のさらなる向上に役立てていきます。

意見交換会の参加者
岐阜大学より、応用生物科学部 村瀬哲磨教授、工学部 海老原昌弘教授、工学部 櫻田修教授、長谷川典彦名誉教授、園田秀久管理部 施設主幹、管理部施設課から白井隆司管理部 施設課長ほか3名、ISO14001学生委員会から2名

静岡大学より、施設課から堀籠利宏副課長

本学より、環境安全衛生管理室 富田賢吾教授、原田敬章准教授、未来社会創造機構 神本祐樹准教授ほか環境報告書2020編集チームから学生を含めた8名

名古屋大学環境報告書2020についての主な意見

(1)評価いただいた内容

- 表紙を公募しているため、多くの方が環境報告書を知るきっかけとなり、親しみや愛着も持つと思う。
- 表紙の公募で表彰される方への景品を、大学のオリジナルグッズでそろえられていることは、受賞者も喜んでいるのではないかと思う。
- 「学生の視点から」のページは、学生にとって、身近な環境問題を考える良い機会になる。
- 写真・グラフ・表・副題など見やすく工夫されており、分かりやすい。
- 幅広い分野で記事を取り上げており、大学全体で環境活動に取り組んでいる雰囲気が伝わる。

(2)改善提案を受けた内容

- エネルギー使用量と平均気温との相関関係を、調査・分析してみると、さらに興味深いデータになるのではないか。
- 紙類の削減が進んでいるようだが、具体的にどのような取組をしたのかが記載されているといいのではないか。
- 生物多様性や生物形態に関しての記事が増えていることは望ましいと思う。広大なキャンパスであることから、キャンパス内に生息している動植物(昆虫を含む)について記事にしてみてはどうか。
- 「環境」に興味の無い方にも、読んでもらえるような報告書作りは全ての大学において大きな課題である。今後相互に意見交換していきたい点である。
- 農作物の収穫は環境配慮の一部と考え、静岡大学では本年の環境報告書に記事として載せている。名古屋大学もたくさんの農作物を栽培しているので、記事にしても面白いのではないか。

参加した環境報告書編集チームの学生からのコメント

今回で2度目の参加でしたが、今回も学内だけでは出ないような視点の意見がとても新鮮に感じました。静岡大学の「農産物の販売実績」や岐阜大学の「岐阜大学周辺の野鳥」など、マニアックな記事が所々にあるのが魅力的でした。岐阜大学の学生編集チームのパワーを感じたので、本学も学生が作り上げる記事をさらに拡充していきたいです。

生命農学研究科 博士後期課程1年
岡本 卓哲

なかなか見る機会のない他大学の報告書を、作成背景の説明付きで拝見させていただくという、非常に有り難い時間でした。「環境報告書」一つとっても、大学ごとで特色が出ており、それぞれの大学の取り上げられている内容や見せ方から勉強させていただくことが多かったです。ありがとうございました。

生命農学研究科 博士前期課程2年
岸本 ゆりえ

このような機会が少ない中、他大学での取組を知ることは大きな刺激となり、私たちの活動を改めて俯瞰するきっかけになりました。ウィズコロナの時代において、持続可能な活動を考えていきたいと思います。

農学部3年・環境サークル Song of Earth
大槻 峻介

それぞれの大学が特徴を生かしながら取り組んでいることを知ることができ、大変有意義な時間でした。特に、困難な状況でも活動に取り組む他大学の学生活動の話は、私たちも工夫して活動をしようと思うきっかけになりました。環境サークル間でも、今後交流を深めたいと思いました。

理学部2年・環境サークル Song of Earth
王 愛里

意見交換に参加した三大学の『環境報告書2020』

岐阜大学 環境報告書2020

静岡大学 環境報告書2020

名古屋大学 環境報告書2020

第三者評価

本学の環境報告書の内容の充実を図るため、豊橋技術科学大学で都市熱環境や大気環境を研究されている東海林孝幸先生に、改善すべき点などコメントをいただきました

豊橋技術科学大学建築・都市システム学系に所属している東海林孝幸と申します。今回初めて貴学の環境報告書の評価に関わる機会をいただき感謝しています。豊橋技科大ではキャンパスマスタープラン作成の主に環境保全・エネルギー削減の面から関わった経験があります。一般的に環境報告書というと本報告書第３章の部分のみ主に取り上げられることが多いのですが、貴学が発行しているような環境に関する教育・研究紹介や学生活動までを含めたものを目にしたことがありませんでしたので新鮮でした。今回は本報告書を「評価」するという立場ですが、参考になる点も多々あり私の所属先でも活用できればと思っています。以下に各章について感じたところを述べます。

＜環境に関する教育・研究＞

地域における農業体験教育から防災に関わる研究まで幅広い取組が分かりやすく紹介されていて、教育や研究を通してどのような社会を目指そうとしているのかが十分読者に伝わる内容になっています。1つだけ「あったらいいな」と思ったのは研究・教育面における社会との関わり、例えば小中高校への出前授業や企業との共同プロジェクトなどの紹介です。今後に期待します。

＜社会的責任・環境コミュニケーション＞

学生が主体となった環境活動の多さに感心しました。本報告書では学生による生態系調査・保全およびリサイクル活動、さらに地域猫の保護活動など幅広く紹介されており、貴学における学生の環境意識の高さが十分伝わってくる内容となっています。可能であれば、本報告書に入りきらない環境活動に関わっている学生団体をリストアップしていただくとより多くのことが貴学で行われていることをアピールできると思われます。

＜環境マネジメント・環境パフォーマンス＞

大学全体の取組が「見える化」されていて、どの程度環境負荷があるのか、過去と比べてどの程度今年度は変化があるのかが一目でわかる構成となっていて見やすい印象を持ちました。さらに、昨年度の報告書にはなかった「だれでもトイレ（多目的トイレ）」導入の紹介もあり、構成員の多様性に配慮した環境整備にも触れられている点も好感が持てました。これをきっかけに環境整備の面から見た多様性への配慮という項目を新たに加えられることを期待します。

最後に、本報告書冒頭にありますように、2020年4月から名古屋大学と岐阜大学の連携が始まりました。それに伴って両大学で進めてきた環境活動もさらなる拡がりや発展が望めると考えています。今後は2つの大学の連携という強みも生かした環境報告書になることを楽しみにしています。

豊橋技術科学大学
建築・都市システム学
東海林 孝幸

オークマ工作機械工学館（東山キャンパス）

オークマ工作機械工学館は、金属のような光沢を持つコンクリートの外壁と、そこに映り込む保存・再生された山手通りの樹木によって、寄附者と考案したコンセプト「Green ＆ Metal」が表現されています。

自己評価

1 はじめに

記載内容の信頼性を高めるとともに、学生を含む多くの関係者に読みやすい環境報告書とするため、完成間近の環境報告書（案）を用い評価を行いました。評価は学外関係者１名および学内構成員（教員１名、職員３名、学生２名）からなる自己評価チームにより、事前の検討および数時間にわたるオンライン会議により実施しました。環境報告ガイドライン 2018 年版※1（以下ガイドラインと略）に基づく評価に加え、内容の正確性・読みやすさのために自由に意見交換を行いました。多様な数多くの意見が出されましたが、その中の代表的なものを以下に示します※2。

2 評価結果

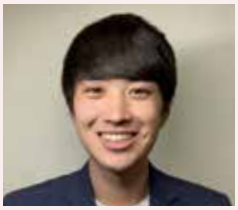
（1）ガイドラインに基づく評価

・環境報告の基本的要件や重要な環境課題について確実に対応しています。
・大学としての長期ビジョンが定まっていません。本年４月に東海国立大学機構が発足した機会に、持続可能な社会の実現に貢献するための大学としての長期ビジョン・ミッション等を定め、それに基づいて名古屋大学および岐阜大学が施策を実行し、その結果を環境報告書で公開するという形が望まれます。
・名古屋大学ではリスクマネジメントに関わる複数の組織がありますが、ガイドラインで要求されている包括的な情報は記載されていませんでした。先端的な教育研究が進められる大学ではその運営に伴いさまざまなリスクが内包しています。東海国立大学機構の役割も含め、次年度にはリスクマネジメントに関する情報を掲載することを期待します。

評価チームの学生からのコメント

自分の大学生活を俯瞰し、大学全体で何が起こっているのかを知る良いきっかけになりました。また、教職員の方々が学生の声・学生目線を取り入れようとしてくださっていることにも改めて気づくことができ、総じて自分の大学・大学生活を見つめ直すことができました。

環境報告書自己評価委員会を通して、本学が環境問題やSDGsに対して積極的に取り組んでいる事を知りました。本学の一員として貢献出来る事はないか考え直す良い機会となりました。

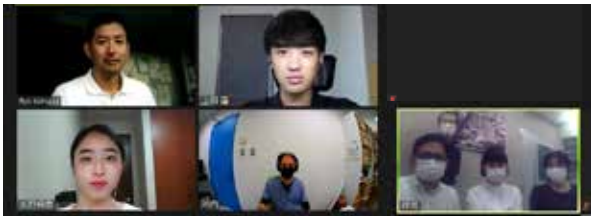


経済学部 経営学科３年
上田 蓮

教育学部 人間発達科学科３年
水野 伶美

（TEDxNagoyaU 2020実行委員）

※1：「環境報告ガイドライン（2018年版）」（環境省、2018年6月）
※2：下記Web ページで、自己評価に関する詳しい内容をご覧いただけます。
http://web-honbu.jimu.nagoya-u.ac.jp/fmd/06other/guideline/e_rpt.html



オンラインでの自己評価委員会の様子

（2）内容の正確性・読みやすさの観点からの評価

・全体として読みやすい報告書との評価でした。冒頭の東海機構の記事もデザインを含め好評でした。
・学生による教員へのインタビュー、学生の活動紹介および学生の質問に答えるコーナーなど、学生目線に立って作成されていることが理解できる紙面となっていました。今後、さらに広範な学生の活動や意見等の記事が増えることを期待します。
・１章および２章の記事は非常に興味深いテーマが取り上げられていました。内容は非常に面白いのですが、全体として記事のタイトルや本文の表現がやや「おとなしい」ように感じます。客観的に記載すべき記事もあるとは思いますが、より多くの読者を引きつけるためには、記事によっては少し思い切った表現を使うなど、読者を引きつける工夫があると、なお良いと思います。
・温暖化ガス排出削減や廃棄物削減など基本的なデータについてはうまくまとめられていました。一方、大学としてどういった方策でさらなる削減を進めようとしているかといった記載は必ずしも十分ではありませんでした。大学の構成員に協力を呼びかけるような表現を含め、さらに充実が望まれます。

（3）その他

・数年前の環境報告書から男女共同参画など広義の環境問題への取組についても報告されていますが、今後、SGDs の観点からもより積極的に広範な記事が掲載されることを期待します。
・来年度の報告書では、本年度のコロナ禍が大きく影響するものと思われます。本年度のうちから、事前に記事内容等を検討しておくことが望まれます。
・全体としてレベルの高い報告書といえますが、報告書の認知という点では関係者以外ではかなり低いといわざるを得ません。印刷物の配布先や Web への掲載方法の見直しを含め、SNS を利用するなど、新しい手段についても今後検討することを期待します。

3 おわりに

環境報告書は持続可能な社会の形成に向けた大学全体の活動を紹介するものです。もとより、自己評価は大学全体の活動そのものを評価するものではありませんが、自己評価というプロセスを通して大学の活動が少しでも前進することを願っています。

本年度も編集チームをはじめとした関係者の皆さんの努力ですばらしい報告書を作成されたことに敬意を表します。

名古屋大学概要

(1) 大 学 名　　国立大学法人東海国立大学機構　名古屋大学

(2) 所 在 地　　〒464-8601　愛知県名古屋市千種区不老町

(3) 創　　基　　1871年

(4) 総　　長　　松尾 清一

(5) 敷地面積（2020年5月1日現在）

①東山キャンパス	愛知県名古屋市千種区不老町	698,137 ㎡（借入含）
②鶴舞キャンパス	愛知県名古屋市昭和区鶴舞町65	89,137 ㎡
③大幸キャンパス	愛知県名古屋市東区大幸南1-1-20	48,463 ㎡
④東郷キャンパス	愛知県愛知郡東郷町大字諸輪字畑尻94	283,731 ㎡
⑤豊川キャンパス	愛知県豊川市穂ノ原3-13	94,212 ㎡
その他	宿舎や演習林など	2,001,812 ㎡（借入含）

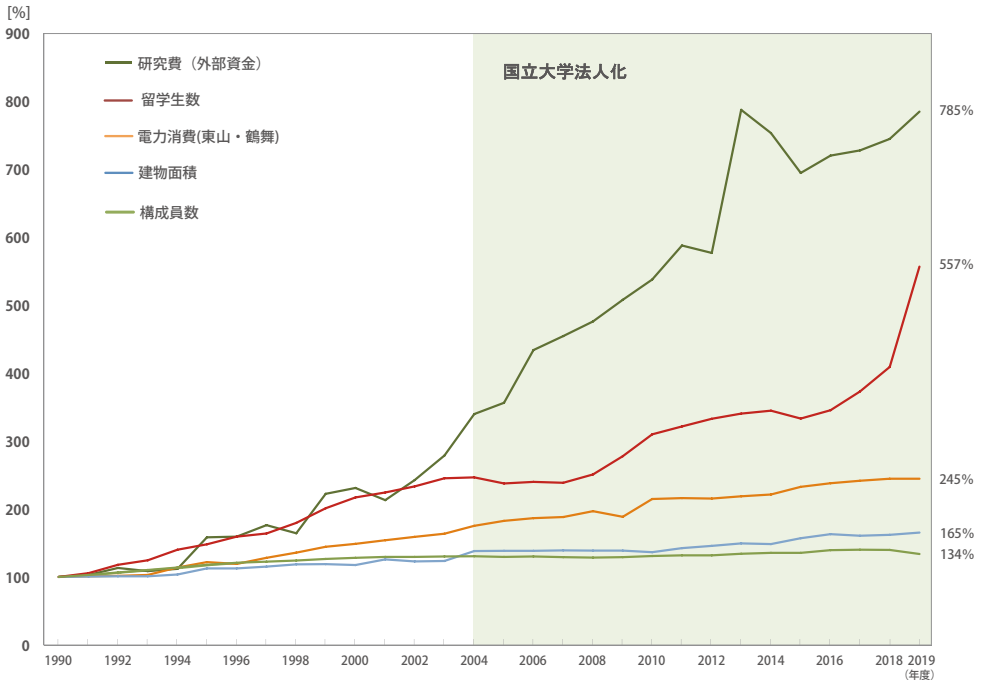
(6) 建物延べ床面積（2020年5月1日現在）　818,087 ㎡（借入含）

(7) 構成員数（2019年5月1日現在）

		男性	女性	計
教職員 ※		2,787	2,053	4,840
学部	学部学生	6,701	2,884	9,585
	学部研究生等	105	92	197
大学院	博士前期課程	2,689	1,077	3,766
	博士後期課程	1,044	584	1,628
	医学博士課程	502	200	702
	専門職学位課程	55	37	92
	大学院研究生等	94	69	163
附属学校	中学校生	119	119	238
	高等学校生	168	191	359
計		14,264	7,306	21,570

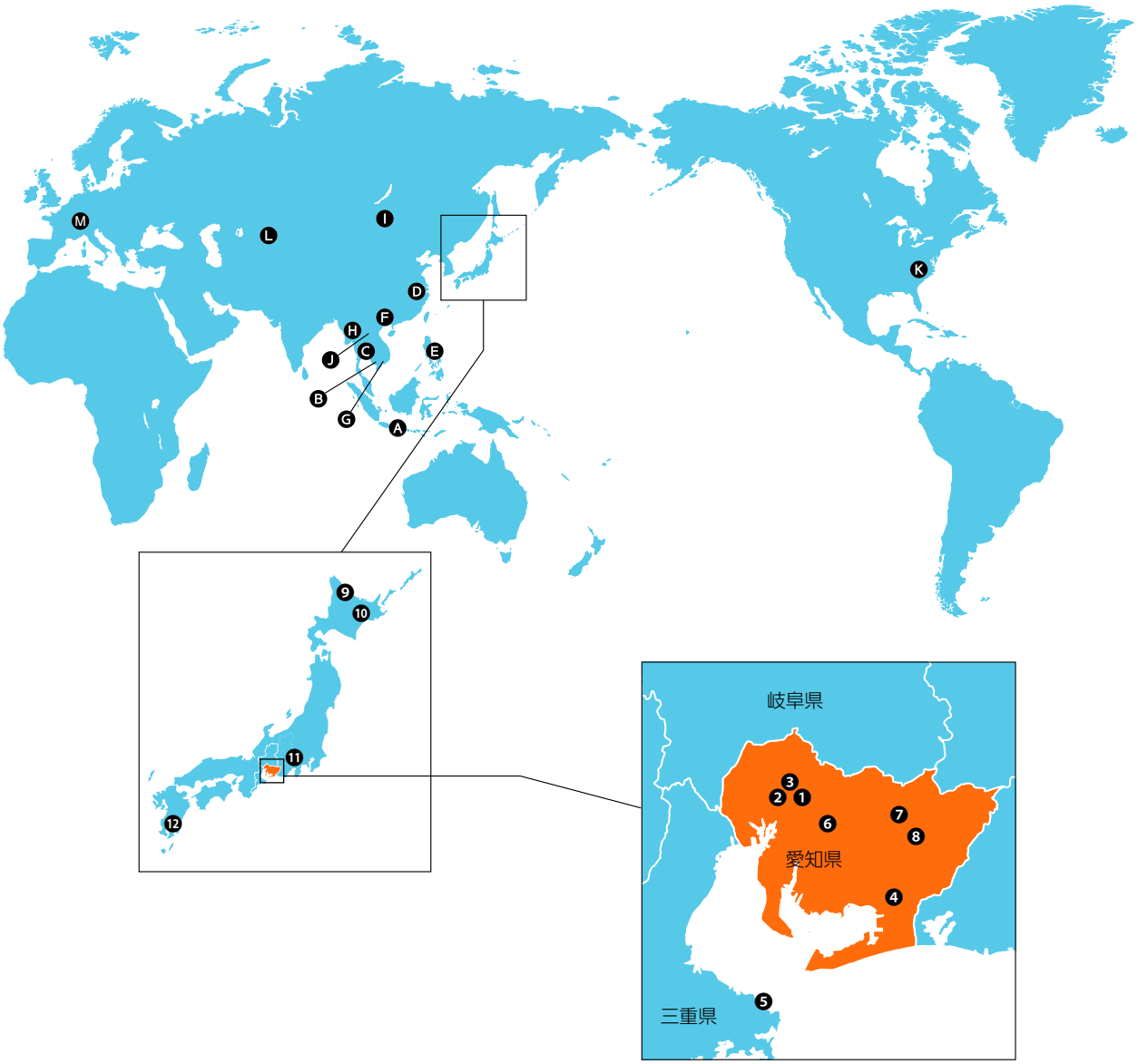
※:役員を含み、非常勤職員や派遣職員は除きます。

(8) 諸指標の推移（1990年度実績を100とした時の割合）



(9) 名古屋大学ホームページ　http://www.nagoya-u.ac.jp/

キャンパス所在地・海外拠点一覧



海外拠点

注 名古屋大学海外拠点認定規程に定められたもの。

- Ⓐ インドネシア・日本法教育研究センター(インドネシア)
- Ⓑ カンボジア・日本法教育研究センター(カンボジア)
- Ⓑ カンボジアサテライトキャンパス拠点(カンボジア)
- Ⓒ バンコク事務所(タイ)
- Ⓓ 中国交流センター(中国)
- Ⓓ グローバル産学連携上海拠点(中国)
- Ⓔ フィリピンサテライトキャンパス拠点(フィリピン)
- Ⓕ ベトナム・日本法教育研究センター(ベトナム・ハノイ)
- Ⓕ ベトナムサテライトキャンパス拠点(ベトナム・ハノイ)
- Ⓖ ベトナム・日本法教育研究センター(ベトナム・ホーチミン)
- Ⓗ ミャンマー・日本法律研究センター(ミャンマー)
- Ⓘ モンゴル・日本法教育研究センター(モンゴル)
- Ⓘ モンゴルサテライトキャンパス拠点(モンゴル)
- Ⓘ 名古屋大学モンゴル国立教育大学 子ども発達共同支援センター(モンゴル)
- Ⓘ モンゴル国立大学・名古屋大学 レジリエンス共同研究センター(モンゴル)
- Ⓙ ラオス・日本法教育研究センター(ラオス)
- Ⓙ ラオスサテライトキャンパス拠点(ラオス)
- Ⓚ 名古屋大学テクノロジー・パートナーシップ(米国)
- Ⓛ ウズベキスタン・日本法教育研究センター(ウズベキスタン)
- Ⓛ ウズベキスタン事務所(ウズベキスタン)
- Ⓛ ウズベキスタンサテライトキャンパス拠点(ウズベキスタン)
- Ⓜ ヨーロッパセンター(ドイツ)

国内主要キャンパス

- ❶ 東山地区
- ❷ 鶴舞地区
- ❸ 大幸地区
- ❹ 宇宙地球環境研究所豊川分室
- ❺ 理学研究科附属臨海実験所
- ❻ 生命農学研究科附属フィールド科学教育研究センター 東郷フィールド
- ❼ 生命農学研究科附属フィールド科学教育研究センター 稲武フィールド
- ❽ 生命農学研究科附属フィールド科学教育研究センター 設楽フィールド
- ❾ 宇宙地球環境研究所附属国際連携研究センター 母子里観測所
- ❿ 宇宙地球環境研究所附属国際連携研究センター 陸別観測所
- ⓫ 宇宙地球環境研究所附属国際連携研究センター 富士観測所
- ⓬ 宇宙地球環境研究所附属国際連携研究センター 鹿児島観測所

名古屋大学環境報告書 2020

編集チーム

編集長
環境安全衛生管理室 准教授　林　瑠美子

環境安全衛生管理室 教授 (2020.4.1から)　富田賢吾

環境安全衛生管理室 准教授 (2020.3.31まで)　錦見端

環境安全衛生管理室 准教授 (2020.4.1から)　原田敬章

施設・環境計画推進室 教授　田中英紀

農学部・生命農学研究科 准教授　山崎真理子

未来社会創造機構 マテリアルイノベーション研究所企画戦略室　准教授　神本祐樹

生命農学研究科　博士後期課程１年　岡本卓哲

生命農学研究科　博士前期課程２年　岸本ゆりえ

工学研究科　修士前期課程２年　テンピア ジュリエット

名大祭本部実行委員会（工学部３年）　クルザド　ケンジ

名大祭本部実行委員会（工学部２年）　伊藤聡子

名大祭本部実行委員会（工学部２年）　田中希帆

名大祭本部実行委員会（工学部２年）　川村隼也

名大祭本部実行委員会（文学部２年）　入學瀬菜

環境サークルSong of Earth（農学部３年）　大槻峻介

環境サークルSong of Earth（法学部２年）　池ヶ谷泰成

環境サークルSong of Earth（理学部２年）　王愛里

管理部 施設課（設備担当）課長　太田剛

施設管理部 環境安全支援課長 (2020.3.31まで)　山本直也

管理部 施設課（環境安全担当）課長 (2020.4.1から)　黒田博一

施設管理部 環境安全支援課 課長補佐 (2020.3.31まで)　大橋昌哉

管理部 施設課（環境安全担当）課長補佐 (2020.4.1から)　水谷聡

管理部 施設課 安全衛生係主任　鈴木昇治

管理部 施設課 安全衛生係　角谷純子

管理部 施設課 安全衛生係 (2020.5.1から)　小松直美

環境サークル Song of Earthの活動についてはP34に、名大祭本部実行委員会、TEDxNagoyaUの活動についてはP35・36に掲載しています。

評価チーム

錦見環境安全衛生コンサルタント事務所　代表 (元 環境安全衛生管理室 准教授)　錦見端

環境学研究科 教授　香坂玲

全学技術センター 技師　河内哲史

文系事務部 総務課 附属学校グループ　主任　福岡千絵

管理部 施設課 施設系係長　藤井美樹

TEDxNagoyaU実行委員会 (経済学部3年)　上田蓮

TEDxNagoyaU実行委員会 (教育学部3年)　水野伶美

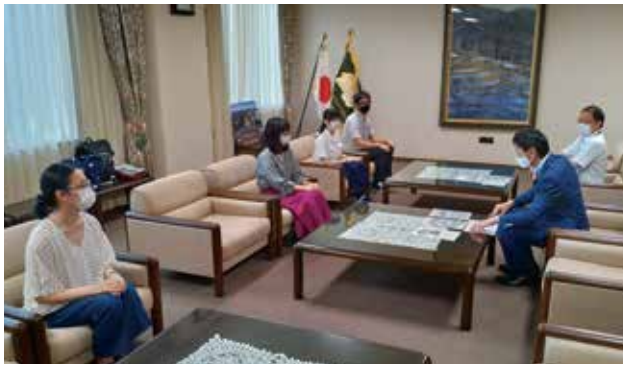
表紙作品の公募について

名古屋大学環境報告書編集方針は、本学の環境に関する幅広い取組を本学の構成員はもちろん、中高生など若い世代や近隣地域にお住まいの方など多くの方に知っていただくことを目的として作成しています。このPR活動の一環として、2016年度から附属学校の生徒を含む本学の学生および教職員に表紙作品の公募を行っており、毎年多数の作品が寄せられ、大賞1名、優秀賞2名の入賞作品を選出しております。2020年度においても素晴らしい作品の応募が寄せられました。

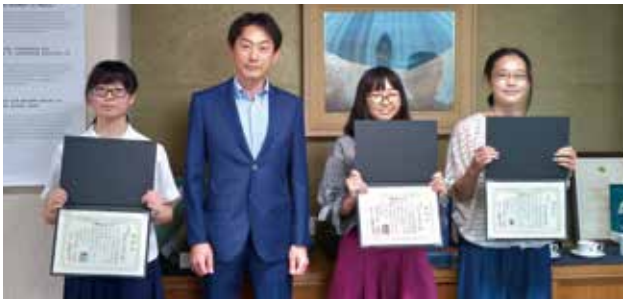
この取組により多くの方々にこの表紙を見て本報告書を読んでいただくことで、本学の教育や研究などを通じたさまざまな環境活動に興味を持っていただく機会とれば幸いです。

今回ご応募いただ皆様と、大学生協をはじめ公募の周知にご協力いただいた皆様に心より感謝申し上げます。

各入賞作品は表紙、P42、裏表紙に掲載しています。また入賞されなかった作品も素晴らしい作品ばかりです。2020年度末まで環境報告書ホームページで紹介していますので、ぜひご覧ください。



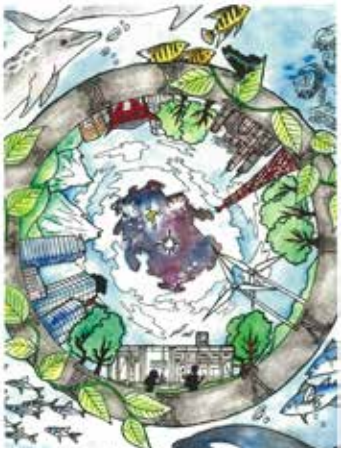
2020年9月に髙橋 宏治運営局長から表彰状の授与を行い、入賞者に作品についてお話を伺いました



左から優秀賞の水野さん、髙橋運営局長、大賞の内木さん、優秀賞の福島さん

名古屋大学環境報告書2020表紙応募作品の紹介
http://web-honbu.jimu.nagoya-u.ac.jp/fmd/06other/guideline/e_rpt_2020entryworks.html

作品コンセプト

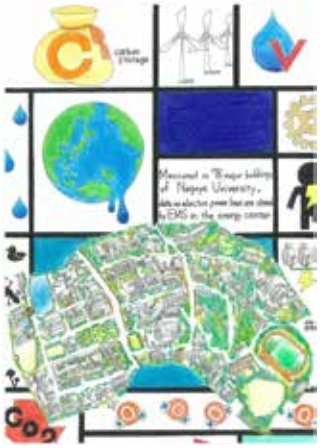


(表紙 掲載)

【大賞】 理学研究科 博士前期課程２年 内木 茉柚子さん

円形は人間社会を含む自然環境は全てつながっており、おのおのが深く関連しているということを表しています。円の内部の建物は名古屋大学(豊田講堂)を中心とした愛知県にある建物をイメージしました。

また、円を時計の文字盤のようなデザインにすることで、終わりのない、循環していく時間の中で持続する自然環境と人間社会を表現しました。未来にわたって自然環境と人の社会がバランスを保ち存続していくよう願いを込めています。



(P42 掲載)

【優秀賞】 教育学部附属中学校３年 水野 七渚子さん

名古屋大学には、数多くの環境に関わるシステム、研究事項、活動等があることを知り、とても驚きました。

そしてそれらは、「地球を守ること」つまり「地球上の全ての生物について考えること」や「地球上の限りある資源を大切に使っていくこと」が根底につながっているのだと感じ、その思いをこの絵に込めました。

(裏表紙 掲載)

【優秀賞】 法学部1年 福島 聡華さん

地球と名古屋大学のロゴを折り紙で作り、その地球にリボンをかけることで私たちが住む美しい地球を私たち自身が守っていこうという思いを表現しました。

また地球に添えた一輪の花には、環境問題を自分とは無関係のことだと決めつけず、小さなことから行動してほしいという願いを込めています。

発　　行／2020年9月
国立大学法人東海国立大学機構名古屋大学
編　　集／名古屋大学環境報告書2020 編集チーム
編　集　協　力／(有)メディアード
お問い合わせ先／管理部施設課環境安全担当
〒464-8601　愛知県名古屋市千種区不老町
TEL：052-789-2116
FAX：052-789-2120
E-mail：e-report@adm.nagoya-u.ac.jp
http://web-honbu.jimu.nagoya-u.ac.jp/fmd/06other/guideline/e_rpt.html
次回発行予定／2021年9月

本書掲載記事の無断転載・複製を禁じます。
本冊子は再生紙を使用しています。